

研究ノート

アメリカ仏教における白人仏教徒の系譜

嵩 満也*

Genealogies of White Buddhist in Early American Buddhism

Mitsuya DAKE*

In this research note, I would elucidate the historical genealogies of White Buddhist movement in early American Buddhism from 1840 through 1912.

Japanese Buddhism was introduced to the United States of America in late 19th century by Japanese immigrants. However, Buddhism was recognized via Europe and became popular among some intellectual and religious seekers who lived in the east coast before that. Today, we can observe some Buddhist groups in the east coast which have no direct relationship with traditional or ethnical Buddhist denominations in America, although they identify themselves as the followers of one of the founders. How and why do they organized the groups and what are characteristics of their teachings? Are there any relationships between the movement of early American Buddhism and today's White Buddhist movement?

In this note, I would like to examine the characteristics of historical development of early American Buddhism in order to answer these questions. Firstly, I would discuss the understanding of Buddhism in the academia and philosophical circle of the east coast in 1840s. Then the establishment of Theosophy Society and the hold of World Parliament of Religions in Chicago are taken up. Lastly, I would take up some early White Buddhists such as Henry Olcott, Paul Carus and Earnest Hunt.

はじめに

本研究は、移民社会アメリカにおいて、日系仏教とりわけ浄土真宗が歴史的・思想的にどのような受容されてきたのか。また、その受容の過程でどのような変容が見られるのかについて、近年アメリカ各地で見られるようになった非日系アメリカ人により運営されているグループに焦点を当てて考察しようとするものである。

アメリカの浄土真宗グループは、これまで日本人移民をそのルーツとするものであった。ところが、最近そのような日系社会とは関係を持たない白人アメリカ人を主体とした浄土真宗のグループが各地に誕生している。本研究では、これらのグループがどのような経緯で生まれたのか、またその活動内容や教えにどのような特色が見られるのかということを明らかにすることを目的としている。今回の報告では、研究の中間報告として、19世紀半ばごろから20世紀初頭にかけて生まれた白人仏教徒の歴史とその思想的な特色について整理をしておきたい。

* 龍谷大学国際文化学部

1. 初期のアメリカ仏教

1844年頃までは、まだアメリカ本土には中国や日本などのアジアの仏教国からの移民は存在せず、仏教についての情報はほとんど知られていなかった。

ヨーロッパで既に知識人たちの間で広まっていた仏教が初めてアメリカで紹介されたのは、1844年5月にボストンで開催されたアメリカ東洋学会（American Oriental Society）においてであった。この学会で、エール大学でアラビア語とサンスクリット語を教えていたエドワード・サリスバリー（Edward Salisbury）が、「仏教の歴史の報告」という題で報告をおこなった。これが公の場所で仏教が取り上げられた嚆矢である。また同じ年に、エリザベス・ピーボディ（1804–1894）は、フランス語訳から『法華経』の一部を英訳した。

サリスバリーの発表は、当時ヨーロッパで問題にされていたブッダの存在をめぐるものであった。すなわち、実証的な歴史学が発展した19世紀のヨーロッパにおいて、それまで伝承にもとづいて事実と見なされてきたさまざまな出来事や、歴史的な人物の存在を証明する証拠が求められるようになった。イエスやブッダについても歴史的な存在を証明する証拠が求められ、ヨーロッパの歴史学界では、賛否両論の見解が出されていた。サリスバリーは、ブッダが歴史的な存在であるという主張をおこなうとともに、仏教が当時東南アジアや東アジアで3億人以上の信者をかかえている理由として、仏教が王権を支持し、哲学的で人類に重要な宗教的価値を与えたからであると論じた¹⁾。

ヨーロッパの学界では、すでにインドに裁判官として赴任した経験を持つイギリスのウィリアム・ジョーンズ（1746–1794）が、インドでベンガル・アジア協会を設立し、インドの古い言語であるサンスクリット語を学ぶとともに、サンスクリット語がヨーロッパの古代ギリシャ語やラテン語と共通の起源をもつ言語であることを指摘した。当時ヨーロッパでは、東洋からもたらされるエキゾチックな文物に関心が集まり、東洋趣味が上流階級を中心に広がっていたこともあり、ヨーロッパの言語の起源がインドの言語と共通であるというジョーンズの説は学界のみならず一般社会にも大きな関心呼びおこした。その後、ドイツのフレデリック・シュレーゲル（1772–1829）らがサンスクリット語の研究をさらに進展させ、その中で紹介された仏教の教えにも人々の関心が集まった。特にヨーロッパで一般の人々の仏教への関心を呼びかけになったのは、アルトゥル・ショーペンハウエル（1778–1860）の哲学の影響を受けたフリードリヒ・ニーチェ（1844–1900）などの哲学者やヘルマン・ヘッセ（1877–1962）などの文学者の作品であった。

ショーペンハウエルは、自ら「仏陀、エックハルトそしてこのわたしは同じことを教えている」²⁾と述べているように、ブッダの教えとキリスト教の神秘思想家エックハルトに傾倒し、著作の中で仏教は他の宗教よりも卓越しており、その世界観は他の宗教的な世界観より上位に位置づけられるべきであると主張した。彼自身は必ずしも仏教徒に改宗したわけではなかったが、思想として仏教を高く評価したのである。ショーペンハウエルは代表作『意志と表象としての世界』の結びで「意志を完全なまでもなくしてしまった後に残るものは、（中略）いうまでもなく無である」³⁾と述べているが、生は本質的に苦しみでしかなく、生への意欲の否定こそが意志のなしうる最善の行為であると考えていた彼にとって、ブッダの教えはまさに生への意欲を断ち、虚無を積極的に受け入れたものとして自らの哲学と重なるものだったのである。このような彼の厭世哲学は、同時代の

人々から賛否両論の評価を受けたが、その理解の是非はおくとして、同様に仏教に対する賛否両論の議論を巻き起こすことになった。

さらに、オックスフォード大学のサンスクリット語講座の教授になったマックス・ミュラー（1823-1900）は、アジアの聖典を英訳し『東方聖典』50巻を刊行した。この事業には、日本からイギリスに留学していた南條文雄、高楠順次郎らも参画したが、その後の欧米におけるアジアの宗教についての研究の基礎をつくる大事業であった。

また、1844年には、コレッジ・ド・フランスの教授で近代仏教学の父とも呼ばれるウージェーヌ・ビュルヌフ（1801-1852）が『インド仏教史入門』という大著を発表した。このことにより、仏教の思想全体が客観的に明らかにされ、その後の学術的な仏教研究に大きく寄与した。

このようにヨーロッパで仏教に対する関心が高まる中で、サリスバリーが、アメリカに仏教を紹介したのである。彼の発表は、アメリカ東海岸の知識人たちの関心を呼び、その後、直観や感覚を超えたものの存在を重視する先験主義あるいは超越主義と呼ばれる思想を説いた文学者ラルフ・エマーソン（1803-1882）やヘンリー・ソロー（1817-1862）らに影響を与えることになった。

エマーソンやソローは、自然の中に理性では説明のつかない事象の存在を認め、それを超自然的な力や霊性（スピリチュアリティ）のはたらきとして説明しようとしたが、その解釈には仏教の影響が見られる。

たとえば、エマーソンは1836年に書いた『自然』というエッセイの中で、次のように自然と魂の関係を語っている。

「野や森の与えてくれる最大の喜びは、人間と植物との間の不思議な連関が暗示されることだ。」⁴⁾

「自然は、普遍的な霊が個別者に語りかけ、個別者を霊のもとへ連れもどそうとするとときに用いる機関だ。」⁵⁾

超越主義は、個人にやどる魂を全面的に信頼し、魂に対する制約をいっさい拒否するロマン主義的な信仰運動で、唯物論的な世界観や教会に広がっていた形式主義に反対し、道徳に対する功利主義的な態度をも批判する立場をとった。また、エマーソンに見られるようなロマン主義的な自然観は、18世紀のルソーの思想など、西洋の歴史の中で繰り返し出てきた自然回帰の思潮と軌を一にするものでもあった。

エマーソンは、そのような信仰理解に立って、

「世界は象徴として存在している。語られる言葉の部分々が隠喩なのだ。自然全体が人間精神の隠喩だからだ。」⁶⁾

「自然と調和した生活、真理と徳を愛する心が、目を洗い清めて自然の中に書き込まれた聖句を理解させてくれる。」⁷⁾

と、自然が人間の語る言葉の想像力の源であり、人間の精神を反映したものであると考えた。そして、自然とのかかわりの中で、人間が自己にめざめ自己信頼を獲得し、魂をものの呪縛から解放して生きることを説いた。

このようなエマーソンの主張は、仏教が自己の欲望や執着を捨てて、本来の自己に目ざめ、自己と他者、自己と世界をありのままに理解し、その智慧にもとづいて生きることを説くことと共通点を持つものであった。エマーソン自身、「仏教徒は、実に超越主義者である。それは、よい行いは

必ずよい結果を招くという固い信念を持っているからである」と述べているが、そのような超越主義的な生き方の範例を仏教徒の生き方に見い出していたとすることができる。

また、エマーソンの思想に大きな影響を受けたソローは、ボストン近郊のコンコードに近いウォールデン湖のほとりに一人で移り住み、そこでの生活や思索を『ウォールデン森の生活』という本として出版した。この本の中でソローは、人間中心主義的な自然理解を離れて自然に生きることの大切さを説き、具体的な自然との交流の中に人間の精神的な高まりがあると説いた。ソローは自然を愛し、キリスト教のような一神教から距離をおき、瞑想的な生きかたを実践しようとしたのである。このようなソローの生き方を彼の友人の一人は「彼は瞑想の頂点に達する仏教僧のように振る舞っていた。」⁸⁾と回想しているが、『ウォールデン森の生活』を含む彼のエッセイは多くの人々に読まれ、読者の仏教に対する関心を高めることになった。

ただ、キリスト教を雛形とする宗教観をもつ西洋人にとって、仏教は宗教というより哲学に近い思想として理解された。仏教を“ブディズム”と呼ぶが、一つの哲学的な主義・主張を意味する「イズム」をつけて呼んだのはそのためである。このことは、近年指摘されるオリエンタリズムの一例だと言える。また仏教の側でもその呼称を受け入れていることからすると、既に西洋の視点を自己理解の上に投影していたと見ることができる。

一方、そのような仏教に対する関心の高まりは、同時に仏教に対する誤解や非難も生み出すことにもなった。たとえば、仏教をニヒリズム（虚無）の思想、神の存在を否定する無神論、仏像という多くの神像を礼拝する偶像崇拜の宗教といった、現在でもしばしば見受けられる誤解や非難はこの時代に広くキリスト教世界に広がっていった。

またこの時代には、自らアジアに出向いて直接仏教をはじめアジアの宗教に触れようとする動きも生まれた。その嚆矢となったのが、1880年にスリランカで入信式をおこない、アメリカ人最初の仏教徒となった退役軍人ヘンリー・オルコット（1832-1907）と資産家で心靈現象に興味を持ち、神秘思想やオカルトの根本にある真理の探求を目的とした神智学を提唱していたヘレナ・ブラヴァツキー（1831-1891）であった。

2. 神智協会の設立とヘンリー・オルコットの活動

オルコットとブラヴァツキーは、当時アメリカで流行していた降霊会で初めて出会った。降霊会とは1840年頃からアメリカ東海岸で始まり、その後ヨーロッパにも広がった集会で、霊媒師を中心に、あるいは一つのテーブルを取り囲んで、死者の霊と交信しようとするものであった。集会で意気投合した二人は、1875年に神智学協会（Theosophical Society）をニューヨークで設立した。

神智学（Theosophy）という言葉は、古代ギリシャ語 Theosophia を語源としており、「神聖な叡智」という意味をもつ。もともとは、3世紀のギリシャの思想家であるサッカスとその弟子であったオリゲネスやプロティノスらが用いた言葉であったが、ブラヴァツキーはその思想の3つの柱について、箇条書きで次のように説明している。

- ・全宇宙の根底には、一つの絶対的で人智を超えた至高の神霊や無限の霊力が存在しており、見えるものも見えないものも含めた万物の根源になっている。
- ・思想普遍的な魂からの放射である人間は、その至高の神霊と同一の本質を共有しているがために初めから永遠で不滅である。

・「神聖な仕事」を通じて神々の働きを実現すること。⁹⁾

このように、全宇宙の根底に、人智を超えた一つの至高の心霊や無限の霊力が存在しており、人間はその心霊と同一の本質を共有していることから永遠不滅であり、そのような「神聖な仕事」をおこなうことにより神々のはたらきを実現するところに神智学の目的があった。神智学協会では、洋の東西のさまざまな宗教、神秘思想、オカルトを一つの真理のもとで統一的に捉え、古代エジプトのイシス信仰、ギリシャのヘルメス思想、グノーシス主義、錬金術、占星術、ゾロアスター教、ヒンドゥー教、そして仏教などの思想を探求し、万物の一元的な真理を追究するとともに、それを神秘的な体験として自己の上で実現するために定期的に集会を開いていた。ブラヴァツキーが提唱した神智学は、一見雑多な思想の寄せ集めの感もあったが、歴史的に見ると東西の宗教の交流の場としての役割も果たした。特に、キリスト教を宗教的な背景としてもつアメリカ人と仏教とを結びつける上で重要な役割を果たした。

1878年には、オルコットとブラヴァツキーは神智学協会の本部をインドのムンバイに移転し、活動の拠点をアジアに移した。このことは欧米の植民地地下にあったアジアの国々における仏教復興運動にとっては大きな出来事となった。二人は、1880年にスリランカ南部のゴールの町で仏教への入信式をおこない、正式に仏教徒となった。(1885年には、日本でもアーネスト・フェノロサとウィリアム・ビゲローの二人のアメリカ人が受戒し、仏教徒となった。) またスリランカ人のアナガーリカ・ダンマパーラ(1864-1933)とともに、スリランカの仏教復興運動だけでなく、インドにおける仏教復興運動や、ブッダの聖地(仏蹟)を仏教徒の手に回復するための活動を幅広くおこなった。また、世界じゅうの仏教徒の共通のシンボルとして仏旗を考案し、仏教徒間の連帯を呼びかけ、日本でも数回にわたり訪問し各地で講演会を開き、オルコットらの活動を経済的に支援する日本の仏教徒も少なからずいた。オルコットが書いた *Buddhist Catechism* (『仏教教理問答集』) は、仏教の入門書として広く欧米諸国で読まれ、日本でも翻訳して出版された。

本部をインドのムンバイに移した神智学協会は、仏教だけでなくヒンズー教やゾロアスター教にも関心を広め、下層カースト民の教育にも力を入れ、さまざまな社会活動もおこなった。また、日曜学校や仏教徒の祝日を設けたり、アーナンダ大学、ダルマジャラ大学、マヒンダ大学などの仏教系大学を設立することにも力を入れた。このような社会活動は、他のアジアの仏教国にも影響を与え、日本でも同様な取り組みがおこなわれるようになった。もともとオルコットは、アメリカ東海岸で、キリスト教プロテスタント派の家庭環境の中で育ったが、このように積極的にさまざまな社会活動に取り組んだこの時期のアジアの仏教は、プロテスタント仏教と呼ばれることもある。

ところで、オルコットの仏教理解は、アジア各地でさまざまな展開を見せていた仏教をブッダの教えにもとづいて統一的に理解しようとするものであった。それぞれの伝統の中での解釈にもとづいて説かれていた仏教を、オルコットは教祖であるブッダの教えを中心に置いて統一的な教理として明らかにしようとしたのである。今でこそ、それぞれの開祖をもつ宗派仏教が広まっている日本仏教においても、ブッダの以来の仏教の思想の中でそれぞれの伝統を理解しようとする態度は広まってはいるが、当時はそのようなオルコットの態度はセンセーショナルな出来事であった。このことにより1900年前後には「仏教統一論」と呼ばれる、仏教を宗派の垣根を超えて統一しようとする試みも生まれた。けれどもそのことは同時に、純粋な仏教はブッダの教えであり、アジア各地で歴史的に成立をした仏教はブッダの教え以外のさまざまな要素が混じった不純な伝統であるという

理解につながり、アジアにおける仏教研究の近代化に貢献すると同時に、アジア各地の仏教に対する欧米研究者の偏見も生み出すことになった。

3. アメリカ東海岸の白人仏教徒

オルコットとブラヴォツキーがスリランカで仏教に改宗してから5年後の1885年に、二人のアメリカ人が今度は日本で仏教に帰依した。

一人は明治新政府のお雇い外国人として来日し、東京大学で政治学、哲学、経済学を講義したアーネスト・フェノロサ（1853-1908）である。フェノロサは、もともと美術の専門家ではなかったが、来日後日本美術に深い関心を持つようになり、助手の岡倉天心とともに、文明開化政策により軽視されていた日本美術を高く評価し、その収集・保護につとめた。また、日本の文化財を保護する法律の策定に尽力する一方で、東京美術学校を設立し日本美術の発展にも貢献した。

もう一人は、日本美術の収集家として有名なウィリアム・ビゲロー（1850-1926）である。ビゲローはハーバード大学医学部を卒業した医師であったが、東京大学で人類学を教え、大森貝塚を発見したエドワード・モース（1838-1925）の講演を聞き日本に関心を持ち、フェノロサとともに来日した。日本の風土と文化を愛好し、日本全国を旅行し、個人的に日本美術の収集をおこなった。

フェノロサは、アメリカに帰国後、ボストン美術館の東洋部長として日本美術や仏教美術の収集・紹介に努めたが、現在ボストン美術館が所有する日本関係の収集物の多くはフェノロサとビゲローが収集したものである。

もちろん彼らは、もともと仏教に興味を持って来日したわけではなかった。日本滞在中に仏教に魅了され、1896年に天台宗の園城寺で受戒し仏教徒となったのである。彼らの仏教理解は多分に異国趣味的ではあったが、改宗には彼らが育った19世紀のアメリカ東海岸におけるキリスト教に対する懐疑的な考えと、それに代わる宗教としての仏教への関心の高まりが何らかの影響を与えていたと考えられる。また、同じようにそのような雰囲気の中で育ち、シカゴの世界宗教会議で釈宗演と邂逅した人物がポール・ケーラス（1852-1919）であった。

ケーラスはドイツで生まれたが、ダーウィンの進化論に代表される19世紀の科学の考え方やキリスト教の教義との矛盾に悩み、キリスト教を離れそれに代わる他の宗教や思想を求めていた。彼はドイツの大学で博士の学位を取得し教鞭を執ったが、宗教をめぐる対立から職を辞し、イギリスを経て1884年にアメリカのニューヨークへ渡った。雑誌の編集者として「宗教と科学の統一」などのテーマを扱った。その後資産家の娘と結婚し、その資金をもとにオープン・コートという出版社を設立し、雑誌 Open Court や Monist などを出版していた。

ケーラスは、1893年にシカゴで開催された世界宗教会議に出席し、縁起を説く仏教こそが科学と矛盾しない宗教であると確信し仏教の熱心な支持者となった¹⁰⁾。この会議には、日本の仏教界から、真言宗の土宜法竜、天台宗の芦津実全、臨済宗の釈宗演、そして浄土真宗の八淵蟠竜の4名が参加していた。会議で出会ったケーラスと釈は意気投合し、ケーラスは釈に彼の出版の手伝いをしてくれる人物を紹介してくれるように依頼した。釈が推薦したのは、当時鎌倉で彼のもとで参禅をしていた鈴木大拙（1870-1966）であった。鈴木大拙は、1897年に渡米してケーラスが創めたオープン・コート社で東洋学関係の出版物の編集の仕事を手伝いつつ、自分でも『大乘起信論』の英訳を行ない、仏教と日本文化を紹介することにつとめた。1909年に帰国した鈴木は学習院大学、大

谷大学で教鞭を執り、戦後もたびたび渡米して、コロンビア大学やハーバード大学、エール大学等で禅仏教や日本思想について講義をおこない、戦後アメリカの禅ブームの立役者となった。

ケーラスは、1894年にブッダの教えるについて書いた *Gospel of the Buddha* という本を出版したが、この本はアメリカの白人仏教徒の愛読書となった。ケーラスは、オルcottのように、自らはアジア各地に出かけることはなかったが、19世紀末から20世紀のはじめにかけてのアメリカの白人仏教に大きな影響を与えた。

ところで、シカゴで開かれた世界宗教会議にオルcottは、スリランカのアナガーリカ・ダンマパーラを伴って参加した。当時の多くの欧米人にとって、仏教はもとよりヒンズー教やイスラム教などの東洋の宗教は、書物をととしてしか知る機会はなかった。ところが、この会議では日本の仏教徒はもとより、英語を自由に操る褐色の仏教徒が、生きた宗教としてのブッダの教えを人々の前で語ることの衝撃は大きかった。ダンマパーラの講演は聴衆の好評を博し、会議後ダンマパーラが1891年にスリランカの仏教復興のためにコロomboに設立した大菩提会のニューヨーク支部が開設された。最初の上座部仏教の拠点がニューヨークに設立されたことは、アメリカ仏教の歴史において大きな出来事であった¹¹⁾。

このようにして、19世紀半ばから20世紀初めにかけて、アメリカでは東海岸の知識人を中心に仏教に対する関心が高まり、白人のアメリカ仏教徒が生まれその後のアメリカ仏教の礎が築かれた。ただ、アメリカ仏教の礎は、ほぼ同時期にアジアからの移民たちによって全米各地に築かれることになった。そこで、次に、非日系アメリカ人仏教徒とアジアからの移民仏教との関係を示す実例として、時代は少し下ることになるが、1920年代以降にハワイで浄土真宗の僧侶となったアーネスト・ハント（1876-1967）について少し触れておきたい。

4. 白人仏教徒ハントのハワイでの活動¹²⁾

ハワイの浄土真宗の教団である本願寺ハワイ開教区の英語伝道部で二代目の主任となったアーネスト・ハント（1876-1967）は、非日系人でありながらも仏教徒となり、開教使として当時ハワイ教区の開教総長であった今村恵猛とともに、初期のハワイ浄土真宗教団の発展に大きく貢献した人物である。

ハントは、1867年にイギリスのハートフォード郡で生まれ、カレッジを卒業後、アングリカン教会へ入会する準備をしていたが宣誓式の前日にそれを辞退し、仏教に帰依したとされることから、渡米以前に仏教のことはある程度知っていたと考えられる。

ハントが、いつどのようなきっかけで仏教の教えに触れたのかは詳しくは分らないが、英国海軍貿易船の士官候補としてインドやスリランカに出かけた経験があり、その時に現地の仏教徒と親しくなったことがきっかけとなり仏教徒になったと言われている。

ハントが最初に接した仏教は上座部仏教であるが、彼は同時に大乘仏教についても関心を持っていたようである。

ハントがハワイへ移住したのは1915年のことである。しばらくオアフ島で本屋をした後、1920年初頭にはハワイ島で教団に所属しないまま妻のドロシーとともに仏教の教化活動に従事していた。そして、1924年に今村恵猛の手で得度し、正式に浄土真宗の僧侶となっている。今村との最初の出会いについては明確ではないが、このときハントは「真覚」、妻ドロシーは「真光」という

法名を授かっている。

浄土真宗の開教使となったハントは、精力的にハワイ諸島を巡回して布教活動を行った。また、英語伝道部の主任になってからは、さらに活発な伝道活動を行い、浄土真宗の信徒だけでなく、他宗教の信徒に対しても週二回英語で仏教講座を開いた。ハントは浄土真宗の厳密な教義の伝道よりも、広く仏教を普及することを優先していたようで、子供向けの日曜学校や仏教入門書を書いている。また、すべての宗派が共通して使える英語による仏教式典集である *Vade Mecum* を出版し仏教の普及につとめた。

また、ハントは1928年には「世界仏教徒連絡機関」をホノルル別院に設け、ヨーロッパの仏教徒との連繫をはかったが、ここでおおよそ60人の非日系アメリカ人が仏教を学び、そのうちの11人が今村のもとで入門式を受けた。

このように、ハントを中心に英語伝道部ではさまざまな伝道活動が行われたが、特に非日系人に対する伝道活動は活発で、入信した白人アメリカ人が中心となり白人への伝道を目的とした「白人伝道普及部」と「英文仏教文庫部」が新設された。また、ヘンリー・オルコットとスリランカ僧ダルマパーダが設立した *Mahabodhi Society*（大菩提会）ニューヨーク支部が英語伝道部の直属となった。さらに、当時仏教徒の国際的連帯と世界平和を説いていた中国の太虚の要請をうけ、ホノルルに *International Buddhist Institute*（IBI）の支部をホノルル別院に置くなど宗派を超えた活動を行った。

このようなハントの宗派を超えた活動は、1932年に彼のよき理解者でもあった今村恵猛の突然の死と、教団の「日本化」への舵取りがすすんだことにより、次第に難しくなり、1937年に結局ハントはハワイ教団を去ることになった。

おわりに

アメリカにおける白人を中心とした仏教への興味・関心は、歴史的に見ると1912年頃になると次第に低調となっていく。その意味で、ハワイのハントの活動はとても注目される。1912年以降そのような動きが停滞するの理由として、アメリカ・ノートルダム大学の近代アメリカ史の教授トーマス・トゥードは、以下のような点をあげている。

- ① 仏教に興味を持った人々の多くが、結局仏教にはアメリカ人が好む楽観的（optimism）な要素と行動的（activism）な要素が希薄であると考えた。
- ② 仏教が説く「無我」や「涅槃」という教義は、どのように説明されても、悲観的（pessimism）で消極的（passive）な宗教であるように思われる。
- ③ 仏教は、人間の努力で個人の問題を解決し、社会に貢献し向上させるという点が希薄である。¹³⁾

このような指摘は、仏教に対して今日でも向けられる批判でもあるが、そのような中であって、戦後になると禅仏教さらにはチベット仏教が再びアメリカ社会で深い興味を呼び起こしている。また、規模としてはそれほど大きくはないが、浄土真宗においても日系社会を超えて興味が広がっている。そのことはトゥードが指摘する上記のような課題を解消する形でおこっているのだろうか。それとも、それとは異なる次元で新たな展開が始まっているのだろうか。そのような点に注意しながら、今後さらに研究を進めていきたい。

注

- 1) ブッダの歴史的事実については、1898年にインドのウッタール・プラデシュ州のピプラーワーで「ゴウタマ・シッダルタ」すなわちさとりを開く前のブッダの遺骨を納めたという記述のある舍利函が発見されたことから、この論争は決着がついた。
- 2) ラルフ・ヴィーナー編著、酒田健一訳（1998）『笑うショーペンハウアー』白水社。
- 3) ショーペンハウエル、西尾幹二訳（2004）『意志と表象としての世界』Ⅲ，244頁。
- 4) ラルフ・エマーソン、酒本雅之訳（1972）『エマーソン論文集・上』岩波文庫，43頁。
- 5) 前掲書，94頁。
- 6) 前掲書，64頁。
- 7) 前掲書，67頁。
- 8) Rick Fields, *How the Swans Come to the Lake*, pp.64.
- 9) H. P. ブラヴァツキー、田中恵美子訳（1987）『神智の鍵』『神智学の目的』竜王文庫。
- 10) 1894年にシカゴで開かれた世界宗教会議と明治期の日本仏教との関係については、拙著（2011）「シカゴ万国宗教会議と明治初期の日本仏教界－島地黙雷と八淵蟠龍の動向を通して－」龍谷大学国際社会文化研究所紀要第13号，龍谷大学国際社会文化研究所を参照。
- 11) ダンマパーラにもましてこの会議で人々の賞賛を浴びたのは、インドから参加したヒンズー教改革の指導者スワミ・ヴィヴェーカーナンダであった。「アメリカの兄弟姉妹諸君、汝ら互いに受け入れ、理解し合うべし！」という言葉で始まったヴィヴェーカーナンダの講演は多くの聴衆の心を捉え、宗教や宗派を超えた真理の多様性の主張は、唯一絶対の真理を主張する一神教的な真理に懐疑を懐きつつあった人々を魅了した。会議終了後には全米各地で講演会がもたれ、その結果各地に多くの支持者を得て、ニューヨークにヴェーダント協会を設立した。
- 12) 詳しい浄土真宗本願寺派のハワイ開教における非日系人開教使の活動については、拙著（2008）「浄土真宗本願寺派による初期ハワイ開教と非日系開教使の誕生」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』10号，龍谷大学国際社会文化研究所『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』10号，龍谷大学国際社会文化研究所を参照。
- 13) Thomas Tweed（1992）, *The American Encounter with Buddhism 1844-1912*, pp.153-156.

参考文献

- ケネス・タナカ（2010）『アメリカ仏教－仏教も変わる，アメリカも変わる』武蔵野大学出版会。
- 常光光然（1964）『日本仏教渡米史』仏教出版局。
- Thomas Tweed（1992）, *The American Encounter with Buddhism*